

前号では対話は相互理解を目指すものであることを取り上げました。相互理解と共感は似て非なるものです。意外に思われるかもしれませんが、対話において共感を目指す、相互理解からは遠ざかってしまうこともあります。今回は、この共感をめぐって起こりがちな誤解を取り上げてみたいと思います。

共感を目指さなくてよい

共感とは相手と同じ気持ちになって感情移入することです。したがって、自分と相手の同じところを探そうとします。対話は自分と相手の違いを知ろうとします。実は方向性が真逆なのです。共感とは必須ではありません。共感せねばと思うと、共感できないときに焦って自分の感覚を当てはめたり、違いに対する目が曇ります。

A「3人以上になると話せないんです」、B「あーわかります。緊張しますもんね」、A「いえ、誰に返事をしたらいいかわからないからです」、B「え？それはその場の流れじゃないですか」。

Bさんは空気が読める人の感覚でAさんに共感しましたが、Aさんも空気が読めるだろうという憶測が、Aさんが話せない理由を理解することを妨げています。



違う人がいることを知る

さきほどの例で、BさんがAさんに共感することは難しいでしょう。Bさんは感覚的に空気が読めてしまうので、意図的に空気を読めなくなることは不可能だからです（「読まない」ことはできますが、何が「読まない」行動になるのか判断するには「読めている」ことが必要です）。

しかし、みんな空気を読めるはずという前提ですぐに共感するよりは、共感できないけど空気を読むことができない人もいて、と知る方が対話的です。自分とは違う感覚で生きている人がいることを知れば、その人にとって必要な環境条件と、自分が心地よい環境条件は異なるだろうと考えることができます。

共感を目指すのではなく、共感できない人の存在を知ること。それが対話的な相互理解と相互尊重の第一歩です。感情移入よりも、知性に基づくプロセスなのです。

